



祇園祭圖（部分）——解説一〇六頁参照

いよをえた適切な概説書であることが言われるであろう。私としては、J. Salwyn Schapiro がその Liberalism and the Challenge of Fascism において試みたところの、リベリズムに對するファシズムの挑戦という角度からするより鋭いリベリズム把握の試みのようなものにまで、フランス・パリアメンタリズムの問題が追求されてほしかった。しかしながらボレミークの書と通史とは本來兩立しえないものであらう。諸史實の錯雜のなから政治的・社會的進化の側面を鮮やかに浮彫してみせてくる練達の敘述にたいし多大の敬意をあらわさなければならぬ。

ブルジョア・リベリズム（まさにこの時代が制限選舉君主制といわれるように、この段階のリベリズムにとつては次の段階への脱皮の要請は絶對的であつた。）からデモクラティック・リベリズムへの必然的なメタモルフォーゼ（シヤビロ）の過程において思いがけない奇襲に遭つたフランスは、不名譽なルイ・ボナパルトの支配を甘受しなければならなかつた。しかし、われわれは一八一五—一八四八の歴史がやがて第三共和國において繼承され、そこにおいて次の段階へ到達したことをみることが出来る。現在、更にまた新

しい、きびしい試煉の嵐に立つこの國の政治制度の運命に關してなんらかの關心をいだくものにとつて、この制度の起源をたずねることは決してたんに迂愚のわざたるに畢らない

— 合田裕作 —
P. 224, Collection Armand Colin No. 256

祇園祭圖（部分）六曲屏風一雙

京都・岡田初太郎氏藏

この圖は、祇園會のみを主題とし、片雙に六月七日の山鉦巡行、他の片雙に六月十四日の神輿還幸を描いた六曲一雙の金地障彩色屏風の一部分である。寺町通りの四條近くを南行する神輿の行列と、それにづく見物の市民を示している。この屏風は、圖中の男女人物の風俗や画風から、慶長年間の前半期に狩野派の画家によつて描かれたと思われる。祇園祭圖屏風として現存する最古のもの。この部分圖では南無風俗の人物や、のんびりした婦女子の姿、簡素な民家に興味があらう。

一般に大利繪は、その繪卷に明かな如く、常に風俗画的な要素を多くもつていたが、風俗画を主題として、獨立的に取上げるようになったのは、漸く室町末からである。大和繪系の土佐派が描き始めたらしく、光信の洛中圖屏風、光茂の犬追物圖屏風といふのが文獻に見える。ついで狩野派が画壇を制壓するとともに、狩野派によつて多くの風俗画屏風が作られた。これを画題的にみると、武士的風俗を示すものに、犬追物圖（御物・その他）調馬圖（醍醐寺・多賀神社）などがあり、名所繪としての風景画的要素に風俗画的性質が加つたものに、洛中洛外圖（舊三條家・上杉家・勝興寺）祭禮を描くものに豊國祭圖（豊國神社・徳川美術館）日吉山王祭圖（檀王法林寺）加茂戴馬圖及びこの祇園祭圖などがある。又游樂を描いたものに高雄觀楓圖（秀頼筆・國立博物館）醍醐花見圖、花下游樂圖（長信筆その他）などがある。かかる風俗画は模範にも取上げられ、円満院・名古屋城にその例が残つてゐる。しかし一般に時代が進むに従つて記録的風景的なものから、庶民の風俗、群集の歡樂の描寫に中心が移つてゐる。これらを觀賞したのはやはり上層階級であつたと思われるが、かかる風俗画が流行したのは、近世初期に於ける庶民府邸頭の反映といえよう。又これらを描いたのは主として狩野派の傍系であつた。彼等が最も時代の動向に敏感であつたであらう。

（山根有三）